様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 16 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2010～2011
課題番号：２２７２０１８９
研究課題名（和文）英語の派生接頭辞に関する共時的および通時的研究

研究課題名（英文）A synchronic and diachronic study of English derivational prefixes

研究代表者
長野　明子（NAGANO AKIKO）
筑波大学・人文社会系・助教
研究者番号：90407883

研究成果の概要（和文）：本研究では、英語の形態論と「右側主要部の規則」（形態的に複雑な語の主要部は、構造上右側にくるという一般化）の関係について、英語の接頭辞 be-, en-, de-, dis-, out-, un-を基に検証した。従来、これら 6 つの接頭辞は右側主要部の規則の反例とされてきたが、それらの共時的・通時的特性を詳細に観察すると、実は反例ではないことが証明された。英語は右側主要部の規則に厳密に従う言語であるといえる。

研究成果の概要（英文）：This study has investigated the status of the Right-hand Head Rule (RHR) in English morphology. RHR is a generalization that the head of a morphologically complex word occurs in the rightmost position of that word. Traditionally, English prefixes *be-, en-, de-, dis-, out-*, and *un-* have been considered counterexamples to RHR, but this study has shown that their synchronic and diachronic properties argue against such a view; these prefixes do not head words. The results of this study show that English is a language that strictly adheres to RHR.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	900,000	270,000	1,170,000
２０１１年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：言語学・英語学・形態論
科研費の分科・細目：言語学・英語学
キーワード：英語の語形成、主要部、接頭辞、転換

１．研究開始当初の背景

範疇を変える接頭辞とは、語基の統語範疇を変える派生接頭辞を指し、現代英語では接頭辞 be- (e.g. *befool, belittle*), de- (e.g.

delouse), dis- (e.g. *disillusion*), en- (e.g. *encage, ennoble*), out- (e.g. *outjockey, outsmart*), un- (e.g. *unsaddle*)がその例としてされてきた。右側主要部の規則（Williams 1981）によれば、形態的に複雑な語の主要部はその語の右側の要素であり、主要部の最も重要な機能の一つは範疇の決定である。現代英語では、派生接尾辞は派生語の範疇を唯一的に決定するのに対し、派生接頭辞はそうではない。上記６つの接頭辞は、この一般化からの逸脱であるとされてきた。

この問題に対する解決策として、Marchand (1969), Kastovsky (2006)らは、接頭辞がN・Aからのゼロ派生動詞に付加するという分析を提案する（e.g. [*be*-[[*fool*]$_N$＋φ]$_V$]$_V$, [*en*-[[*noble*]$_A$＋φ]$_V$]$_V$）。現代英語における右側主要部の規則の妥当性を考えた場合、この「ゼロ派生分析」は、当該接頭辞を例外的に左側主要部とする分析（e.g. [*be*-[*fool*]$_N$]$_V$）より好ましいといえる。

しかしながら、応募時点において、この分析の経験的妥当性と理論的意義を体系的に検証した研究は存在しないようであった。研究代表者は Nagano (2001)において接頭辞 *be*-および *en*-に関してゼロ派生分析を検証し、それが意味の観点から妥当であることを主張したが、体系的な検証には至らなかった。その後、研究代表者は英語のゼロ派生／転換について一連の研究を行ない、英語の語形成部門におけるそのステイタスを明らかにした。その研究結果を利用して、改めて、英語の「範疇を変える接頭辞」のゼロ派生分析について、より広範な検証を試みたいと考えた。

２．研究の目的

本研究の目的は、*be-, de-, en-*等の「範疇を変える接頭辞」に焦点をあてて、英語の派生接頭辞付加の共時的および通時的特性を検証することである。具体的には、(a) N/A>V 接頭辞付加は(b) N/A>V 転換と(c) V>V 接頭辞付加の組み合わせであるという分析の妥当性を共時的および通時的観点から検証する。当該接頭辞のそれぞれについて詳細な個別研究を行ない、その結果と、研究代表者の転換に関する先行研究を基に、(a)の特性と発達を(b)と(c)の特性と発達に還元できないか、試みる。この試みが成功すれば、英語の接頭辞は範疇を変えず意味機能のみという、右側主要部の規則に則った一般化が得られると同時に、英語史における接頭辞付加の発達の一部が解明される。

３．研究の方法

以下、(1)-(3)に分けて述べる。

(1)ゼロ派生分析の仮説をより具体的に述べれば、「範疇を変える接頭辞付加とは、N/A>V のゼロ派生（e.g. *fool* > *to fool*）と V>V の接頭辞付加（e.g. *be-* +[*fool*]$_V$ > [*befool*]$_V$)の連続適用である」となる。もしこの仮説が正しければ、次の２点が成り立つはずである。

①範疇を変える接頭辞付加の用法は、通時的に、ゼロ派生と V>V の接頭辞付加の発達の結果として生じた。

②範疇を変える接頭辞の共時的特性は、ゼロ派生と V>V の接頭辞付加（すなわち、当該接頭辞の「範疇を変えない」用法）それぞれの共時的特性に還元される。

本研究では、6 つの接頭辞のそれぞれについて①②の予測を実証することにより、ゼロ派生分析の妥当性を裏付けるという方法をとった。

(2) (1)①の予測の実証においては、次の三点を検証した。第一に、ゼロ派生分析は右側主要部の規則を動機付けとすることから、この規則が英語史を通じて成立するといえるかを確かめた。第二に、６つの接頭辞の V>V の用法が、N/A>V の用法に通時的に先行すると言えるかを検証した。また、用法ごとの生

産性の変化も明らかにした。第三に、ゼロ派生の発達について Biese (1941), Nagano (2008)等で明らかになった事実を整理し、第二の点との相関を考えた。ゼロ派生については、既に、時期ごとの生産性の変化もおおよそ判明していたので、それが(1)類の範疇を変える用法の発生、発達と通時的に(どう)関連するかを検証した。

(3) (1)②の予測の実証のおいては、次の流れで検証を行った。まず、ゼロ派生動詞の特性と(1)類接頭辞の V>V 用法の特性を明らかにした。前者については研究代表者の先行研究で大方調査済みであり、中英語期と近代英語期に関し補うだけでよかったので、後者に焦点を置き、[*be/de/dis/en/out/un*-V]$_V$ の音韻・形態・意味・統語的特性を詳細に調査した。次に、これらの調査結果を基に N/A>V 接頭辞派生語の特性を説明できるかを考えた。例えば[*be*-N]$_V$ 形の意味特性の場合、N>V の転換動詞の意味特性と V>V *be*-の意味特性の相互作用で説明できるかという問題である。主要部である転換動詞の特性がどの程度 N/A>V 接頭辞派生動詞に「継承」されているか、V>V 接頭辞が修飾部としてそこにどのように働きかけるか、これら 2 点を明確に示すことで、(1)②の予測を実証することが可能になった。

４．研究成果

以下、(1)-(3)に分けて述べる。

(1) ゼロ派生分析が経験的に妥当であることが証明された。これにより、「範疇を変える接頭辞」という類を英語の派生接頭辞から消去することが可能になった。

(2) これにより、おそらくいかなる形態理論にとっても望ましい帰結、すなわち、「英語の接頭辞（付加）は範疇機能を持たず意味機能を主とする」という帰結が得られた。接頭辞の主機能が主要部の意味的修飾ということになれば、Marchand (1969)で提案されている接頭辞付加と複合の類似性（同類性）について、積極的に追求していくことが可能になる。

(3) 英語史の観点からは下記のような問題に議論を進めることができ、英語における接頭辞付加の発達について事実・理論の両面で理解を深めることできたといえる。

①接頭辞付加と転換の相互作用で「範疇を変える接頭辞付加」が発達したのならば、なぜその出力は V に限られるのか（cf.転換の出力は V には限られない）。

②なぜ現代英語では「範疇を変える接頭辞付加」は生産性を失ってきたのかという問題、現代英語では「範疇を変える接頭辞」は be-, de-, dis-, en-, out-, un-の 6 つだけとされるが英語史上その目録は（どのように）変化したのか。

③この発達は Bauer (2003)で提案されている「英語の接頭辞付加の複合化」という大規模な変化と（どのように）関係するのか。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　3 件）

①Nagano, Akiko. “Derivational Prefix *be*- in Modern English: The *Oxford English Dictionary* and Word-Formation Theory.” *English Studies,* 査読有, 2012（印刷中）.

②Shimada, Masaharu and Nagano, Akiko. “*Zi*-nouns in Japanese and Related Issues.” 『文藝言語研究・言語篇』59 巻、pp. 75-106, 2011, 査読有.

③Nagano, Akiko. “The Right-Headedness of Morphology and the Status and Development of Category-Determining Prefixes in English.” *English Language and Linguistics* 15 巻 1 号, pp. 61-83, 2011, 査読有.

〔学会発表〕(計　7 件)

①Shimada, Masaharu and Nagano, Akiko. “On the Relationship between Semantics and Morphological Boundness and Its Implication for Diachronic Analysis.” Historical English Word-Formation and Semantics, Academy of Management, ワルシャワ, 2011 年 12 月 11 日.

②長野明子「語形成における接頭辞と接尾辞の区別に関する考察」英語の共時的および通時的研究の会発足 25 周年記念大会, 津田塾大学, 2011 年 8 月 28 日.

③Shimada, Masaharu and Nagano, Akiko. “Development of *Kanji* Pronunciations in Japanese and Its Analysis Based on a Lexeme-Based Morphology.” 20th International Conference on Historical Linguistics (ICHLXX), 国立民族博物館, 2011 年 7 月 29 日.

④Shimada, Masaharu and Nagano, Akiko. “Two Types of Bound Morphemes in a Lexeme-Based Morphology.” Interfaces in Language 3, University of Kent, 2011 年 5 月 5 日.

⑤Shimada, Masaharu and Nagano, Akiko. “A Note on Affixal and Non-affixal Anaphors in Japanese.” The 2011 Winter International Conference on Linguistics in Seoul (WICLIS-2011), University of Korea, 2011 年 1 月 5 日.

⑥長野明子「派生接頭辞の範疇選択特性に関する考察」近代英語協会第 27 回年大会, 京都大学, 2010 年 5 月 28 日.

⑦Nagano, Akiko and Shimada, Masaharu. “On the Category-Changing Prefixation in English.” 14th International Morphology Meeting, ブダペスト, 2010 年 5 月 14 日.

〔図書〕(計　2 件)

①長野明子「複合と派生の境界と英語の接頭辞」『生成言語研究の現在』, 池内正幸・郷路拓也編, ひつじ書房, 2012 (印刷中).

②Nagano, Akiko. “Relationships between Prefixation, Suffixation, and Compounding.” 『ことばの事実をみつめて：言語研究の理論と実証』, 佐藤響子ほか編, 開拓社, pp. 90-100, 2011.

６．研究組織

(1)研究代表者

長野　明子 (NAGANO AKIKO)
筑波大学・人文社会系・助教
研究者番号：90407883